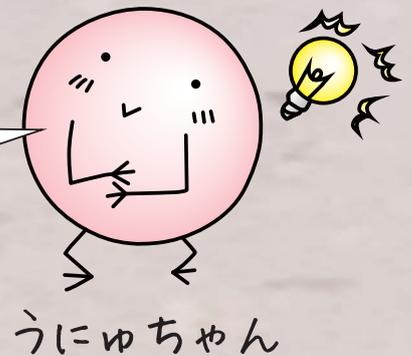


～はじめに～

あまり知られていませんが、実は播磨地域は古代から陶器の生産が盛んな地域であったことが、発掘調査などから分かっています。古墳時代、約 1600 年前の昔から、時代や地域によって異なる個性的な陶器が作られ続けてきました。そうした個性的な陶器の移り変わりは、当時の人々の生活や社会の変化に直結しており、そこから地域や人々の歴史を知ることができます。この展示では「陶器」をキーワードに、播磨地域の個性的な歴史をご紹介します。

今回も僕がご案内するうにゆ！



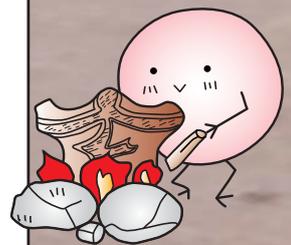
1. 陶器ってなに？

粘土をこねて焼いたものを「やきもの」といい、簡単にいうと、低い温度で焼けたものを「土器」、高い温度で焼けたものを「陶器」と呼んでいます。そして、ひとくちに「やきもの」といっても、作られた時代・作り方・焼けた温度・原料などによって、様々な種類があります。大きく分けると、以下のようなものがあります。

やきものの種類	焼く温度	原料	釉薬（うわぐすり）	代表的なやきもの
どき器 土器	700～800℃	粘土	かけない	縄文土器・土師器など
むゆうとうき 無釉陶器	900～1200℃	粘土	かけない	須恵器など
せゆうとうき 施釉陶器			かける	奈良三彩・灰釉陶器など
せつき 炆器	900～1400℃	粘土	かけない	備前焼・丹波焼など
じき 磁器	1300～1400℃	陶石を砕いたもの	かける	伊万里焼・東山焼など

土器以外のやきものは、焼くときに 1000℃ほどの高い温度が必要なため、専用の「^{かま}窯」を造る必要がありました。この「窯」を造る技術は縄文・弥生時代には日本列島に無く、土器しか作ることができませんでした。日本列島では古墳時代に入って初めて陶器の窯が現れます。

土器は割れやすいけど、火に強いので鍋や釜に、
陶器は丈夫だけど火に弱いので、^{みずがめ}水甕や壺に、
磁器は丈夫で薄くできるので食器に主に使われたうにゅ！
また、手間と燃料がかからない土器は安かったけど、
手間のかかる陶器や磁器は値段が高かったうにゅよ！



うにゅちゃんの
かいせつ

2. 古墳時代の陶器—須恵器の登場—

であい

出合窯跡 (神戸市西区玉津町)

出合遺跡は明石川下流にある遺跡で、弥生時代から鎌倉時代までの遺物や遺構がみつかっています。

この遺跡の中でみつかったのが、4世紀末（古墳時代中期・およそ1600年前）に築かれた**日本最古ともいわれる陶器窯、出合窯**です。

窯は後の時代に破壊されており、みつかったのは一部のみですが、大まかな構造が明らかになっています。その構造は、当時の朝鮮半島で見られる窯と非常によく似ており、朝鮮半島からの渡来人が関わったものと考えられています。

また、ここから出土した須恵器や瓦質土器、軟質系土器も当時の朝鮮半島、特に朝鮮半島南西部（百済地域）から出土するものに非常に近い形状をしており、**百済からの渡来人が築いた窯ではないかとも考えられています。**



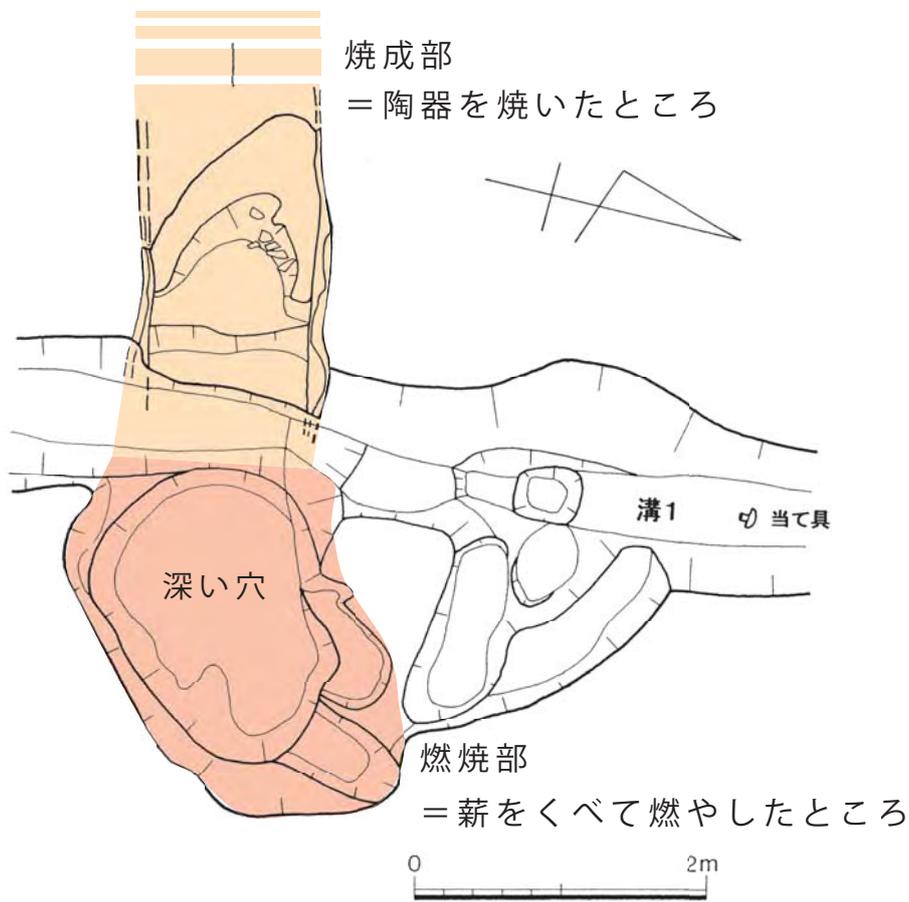
発掘された窯

(岡山理科大学考古学研究室提供)

▲奥が窯本体。手前が薪をくべる部分。

出合窯跡は日本最古の陶器窯だ！という考えもあるぐらいすごく古い窯跡うにゅ！
播磨地域では間違いなく最古の窯跡うにゅ！
播磨の陶器の歴史はここから始まったといえる
記念すべき窯跡うにゅね！





窯の平面図 (亀田2008)

▲ 焼成部の後ろ半分は破壊されて無くなっています。

出合窯跡の構造はとっても特殊！窯の焚口が深い穴の中にあるうにゅ！こうした窯は日本では見つかっていなくて、朝鮮半島に似たかたちのものがあるうにゅ！

たきぐち



うにゅちゃんのかいせつ

出合窯跡ってすごく変うにゅ・・・

窯の構造や出土した遺物のかたちも、後に日本列島で普及するものとは全く違ううにゅ・・・

後の時代に出合窯の技術が引き継がれているかどうかは、今後の研究課題うにゅね！



うにゅちゃんのかいせつ

有年原・田中遺跡(赤穂市有年原)

有年原・田中遺跡は千種川の支流、矢野川に面した丘陵裾にある大きな集落の遺跡です。遺跡の中を大きな川が流れており、そこに弥生時代から古墳時代までの土器や遺物が大量に捨てられていました。



発掘された川

▲右手の大きな溝が、集落の中を流れる川の一部。

その大きな川から出土した土器の中に、5世紀初めごろの初期須恵器とよばれる古い陶器がありました。

出土した陶器には焼くときに歪ひずんでしまったものや、窯の一部がくっついたものがあります。これらは出荷することができなかった失敗作にみられる特徴で、この近くで初期須恵器を焼いた窯があったことを示しています。

また、出合窯と同じように瓦質土器も出土しており、初期須恵器とともに瓦質土器も生産していたと考えられます。

有年原・田中遺跡の窯もとっても古い窯跡うにゅよ！
出合窯跡の20年後ぐらいに築かれた窯跡で、
西播磨では間違いなく最古の窯といえるうにゅ！
特に珍しいのは、瓦質土器うにゅ！
日本列島の遺跡ではほとんどみられないものうにゅよ！



赤根川・金ヶ崎窯跡(明石市魚住町)

明石市東部の段丘斜面に存在した窯です。

窯と、失敗品や灰を捨てた「灰原」^{はいばら}がみつき、大量の須恵器が出土しています。窯で焼かれた須恵器は**6世紀前半**のものです。

また、周辺には須恵器が大量に捨てられた溝が見つかり、その溝からは**5世紀中ごろの須恵器**がみつかっています。

この溝からみつかった須恵器も、周囲の窯で焼かれたものと考えられ、**5～6世紀にかけて須恵器づくりが行われていた**といわれています。



発掘された窯と灰原

(明石市教育委員会提供)

▲窯の右手の黒い部分が灰原。

この窯からは、珍しい須恵器が多く出土しているうにゅ！渡来系遺物といわれていて、渡来人とのつながりが強いのでは？とも考えられているうにゅ！





発掘された灰原

(明石市教育委員会提供)

▲全て失敗品です。焼け歪んだり、割れたりしたものです。

窯を発掘すると、失敗品がたくさん出土するうにゅ！
ふつう、1つの窯で何年も陶器を焼き続けるから、
大量の失敗品が捨てられた状態で出土するうにゅ！
失敗品があまり出土しない窯は、あんまり陶器を焼い
ていない＝^{そうぎょう}操業期間が短いということうにゅね！



那波野丸山窯跡(相生市那波野)

相生市東部の丘陵に存在した窯で、標高 30m程度の小さな山（通称：丸山）の南斜面に**古墳時代～飛鳥時代の5基の窯が築かれていました。**

最も古い窯は5世紀末ごろの窯（3号窯）で、須恵器のほか埴輪も生産していたとされる珍しい窯です。

窯は7世紀初め（1号窯）まで継続して築かれており、窯や須恵器の変遷が分かる貴重な遺跡です。また、窯の残存状況が極めて良く、天井が残っている窯（4号窯）も見つかっています。



2・3・1号窯

▲斜面を利用して窯を築いていることがわかります。

相生市では最も古い窯うにゅ！

この窯をきっかけにして、飛鳥～平安時代にかけて相生市では150基以上の窯が続々とつくられ、西日本有数の窯場へと発展していくうにゅ！





窯跡群の分布図 (『相生市史』)

▲現在は造成されて、工場となっています。



4号窯

▲最も残りの良かった窯で、天井部分が良く残っています。



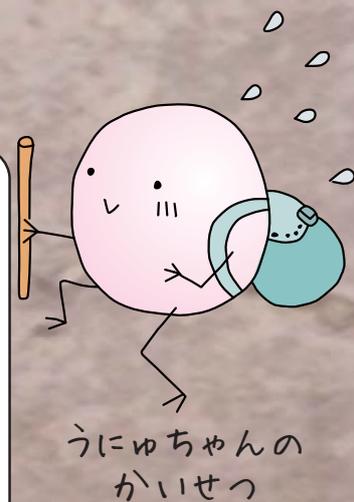
2号窯

▲窯の床がかなり傾斜していることがわかります。

古墳時代の窯の特徴は、地下にトンネルを掘るように造っていることうにゅ！

窯がほぼ完全に地面の下にあるのがわかるうにゅ？

あと、床面の傾斜も強いことが特徴うにゅ！



坂元遺跡埴輪窯跡 (加古川市野口町)

坂元遺跡は加古川市南部、加古川下流の平野部に位置し、旧石器時代～鎌倉時代にかけての大規模な集落遺跡です。

この遺跡の中から、**古墳時代後期（6世紀中頃～後半）の埴輪を焼いた窯**がみつかりました。また、近くにはここで焼いた埴輪を並べた可能性のある古墳も見つかっています。

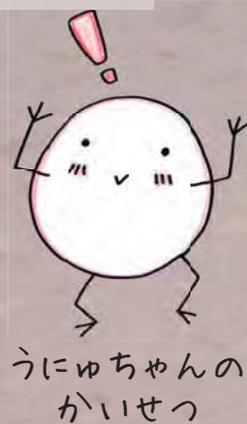
窯は須恵器を焼く窯と全く同じかたちの「あながま窖窯」とよばれるものでしたが、内部や周辺からは埴輪しか見つかっておらず、埴輪専用の窯であったとされています。埴輪には石見型埴輪や人物・鹿・馬・家・盾などの特殊なかたちの埴輪が多いうえ、長期間使われた形跡がないことから、**周辺の古墳へ並べるために臨時的に築かれた窯ではないかと考えられます。**

兵庫県で唯一発掘された埴輪専用窯うにゅ！

窯で焼いているけど、色は須恵器とは違って黄や赤茶色。

おそらく古墳時代の職人が、温度や焼き方を工夫して、灰色にならないように焼いているうにゅ。

埴輪の色にもこだわりがあったみたいいうにゅね！





発掘された埴輪窯 (兵庫県立考古博物館提供)

▲中央の溝が、埴輪窯のあと。



埴輪窯の内部

(兵庫県立考古博物館提供)

▲散乱しているのは全て埴輪。

窯の中には埴輪が残されている
うにゅ！これは、焼いている最中
に天井が落ちてきて、窯が壊れて
しまったのではないかといわれて
いるうにゅ！陶器の窯でも同じ
ように窯の中から製品が出土する
うにゅよ！



うにゅちゃんの
かいせつ

正福寺窯跡(上郡町正福寺)

上郡町南部の丘陵裾にある窯跡です。

発掘調査がされていないため、その内容は不明なところが多いですが、採集された遺物から、**古墳時代後期～終末期頃(6～7世紀)の窯跡**と考えられます。

採集された遺物の中には、窯壁に須恵器が張り付いたものなどもあり、窯跡であることは間違いありません。**上郡町では唯一となる須恵器の窯跡**です。



窯の位置

▲赤穂市との市町境に近い場所です。

上郡町の陶器窯はここ以外に見つかっていないいうにゅ！
あんまりいい粘土がとれなかったのか、それとも相生や備前の窯跡があったから、わざわざ造らなかったのかも！



山田奥窯跡 (赤穂市有年牟礼)

赤穂市東部の山間部にある窯です。

発掘調査はされておらず、窯の数などは不明ですが、採集された遺物から、窯跡であることは間違いありません。

須恵器は**飛鳥時代～奈良時代（7世紀～8世紀）のもの**が多く、この時期に須恵器を焼いた窯と考えられます。

出土遺物に時期幅があることから、複数の窯跡が存在する

窯跡群と考えられます。**赤穂市で確認できる唯一の古代の須恵器窯**です。



窯の位置

この時期、相生市には巨大な窯場ができるんだけど、赤穂市や上郡町では窯がほとんど造られないうにゅ。でも、近くに大きな窯場があるのに、なんでわざわざこんなところに窯を造る必要があったのか、少し不思議うにゅ。一体誰が造ったうにゅ？



相生窯跡群(相生市東部～たつの市西部)

相生市東部からたつの市の市境付近には、**確認されているだけで 150 基以上の窯が築かれており、兵庫県内最大規模の窯跡群**になっています。

その時期はほとんどが**飛鳥～平安時代(7世紀～10世紀頃)**のもので、ここで焼いた陶器(須恵器)を都へ税金として納めたり、周囲の集落へ出荷するために大量の陶器を生産しつづけていました。

平安時代には、窯跡のある地域は秦氏や皇族の^{はたし}荘園となっていたことから、秦氏や皇族からの注文に応えたり、朝廷と関わりのあった窯跡群ではないかといわれています。

奈良時代には光明山・たつの市揖西地区、平安時代には西後明・入野地区に窯が多く、平安時代には最盛期を迎えます。

しかし、平安時代後期(12世紀前半)には徐々に東播磨地域の窯にシェアを奪われるようになり、平安時代末には完全に廃業しています。

那波野丸山窯から始まる相生窯跡群は、本来は 200 基以上の窯があるだろうといわれているうにゅ!

播磨地域どころか、兵庫県内、西日本でも最大規模といえる巨大な窯跡群うにゅ!

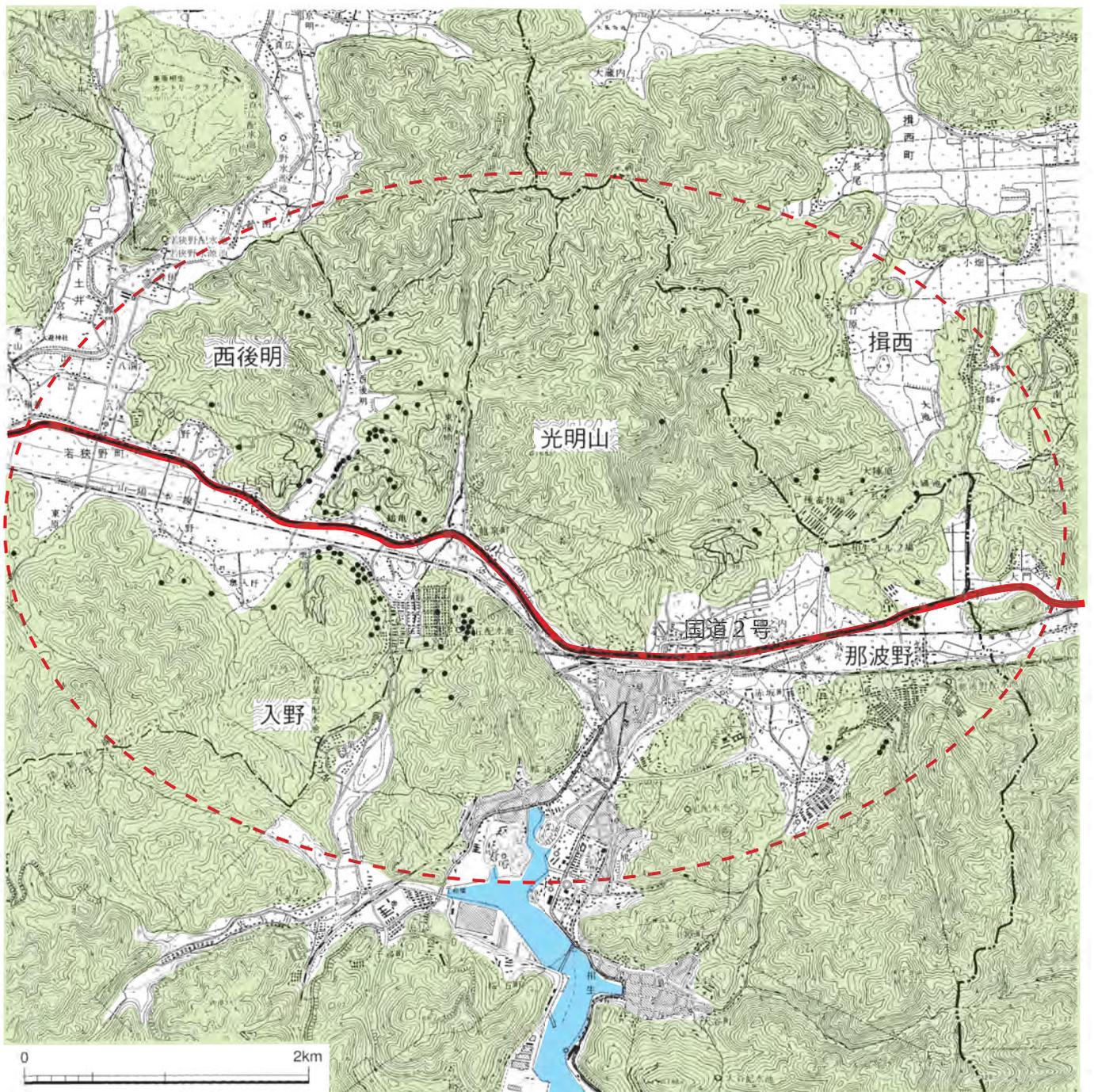
どうしてこんなに巨大になったのかについては、現在も研究が進められているけど、発掘された窯や周辺の遺跡が少なく、いまいちよく分かっていないうにゅ・・・



うにゅちゃんのかいせつ

これが相生窯跡群の全容うにゅ！

ただし、まだ埋まったままの窯や見つからない窯、破壊されてしまった窯もたくさんあるから、本来はもっともっと多いはずうにゅ！



相生窯跡群の分布

▲黒い点はすべて窯跡。兵庫県教委 2003 『緑ヶ丘窯跡群Ⅲ』掲載図を改変。

しかた

志方窯跡群 (加古川市志方町・加西市三口町ほか)

加古川市と加西市の市境にある丘陵に存在する窯跡群で、150基以上の窯が集中する播磨有数の窯跡群です。

主に**奈良時代から平安時代前半（8世紀～10世紀）の窯**が中心です。

この窯跡の特徴は、一般的な須恵器のほかに、「**稜碗**」とよばれるものや、**非常に作りが丁寧な須恵器が生産されていることです。これらの須恵器は、国や役所の特注品であったとされています。**

この窯で焼かれたと考えられる須恵器が、奈良の都（平城京光明皇后宮跡）から出土しており、**皇族や上級貴族が使用する高級陶器を生産していたものと推測されています。**



発掘された窯 (中谷4号窯)

(兵庫県立考古博物館提供)

播磨国は須恵器を税金として都に納めていたから、陶器づくりの産地として都でも有名だったみたい！
皇族や貴族が使用する高級陶器の発注も受けるような一大産地だったうにゆよ！



白沢窯跡群 (加古川市上荘町)

加古川市と小野市の市境にある丘陵に存在する窯跡群で、6基の窯からなる窯跡群です。

主に**飛鳥時代から奈良時(8世紀～9世紀)の窯**が連続と築かれています。

出土している須恵器はほとんどが一般的な陶器で、周辺の集落に出荷されていたものと考えられています。

ただし、香炉の破片や円面硯、人形・土馬など、特殊なものも生産しており、奈良の都(藤原京・平城京)へ須恵器を納めていた可能性も指摘されています。

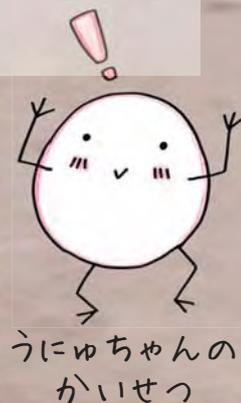
また、この窯のすぐ西側には、奈良～平安時代の巨大窯場、志方窯跡群が築かれており、志方窯跡群との関係も注目されます。



発掘された窯(白沢5号窯)

(兵庫県立考古博物館提供)

須恵器そのもののはとっても普通。当時一般的に使われていたものうにゆね！硯もあるから、役所や寺院に製品を納めていたみたいいうにゆ。





発掘された窯（白沢5号窯）

（兵庫県立考古博物館提供）

発掘のようすにゆ！黒いものは、窯から出た灰や炭！
地面が真っ黒うにゆ！この灰や炭のなかに、たくさんの
失敗品が捨てられているうにゆよ！



うにゆちゃんのかいせつ

峰相山窯跡群 (姫路市青山ほか)

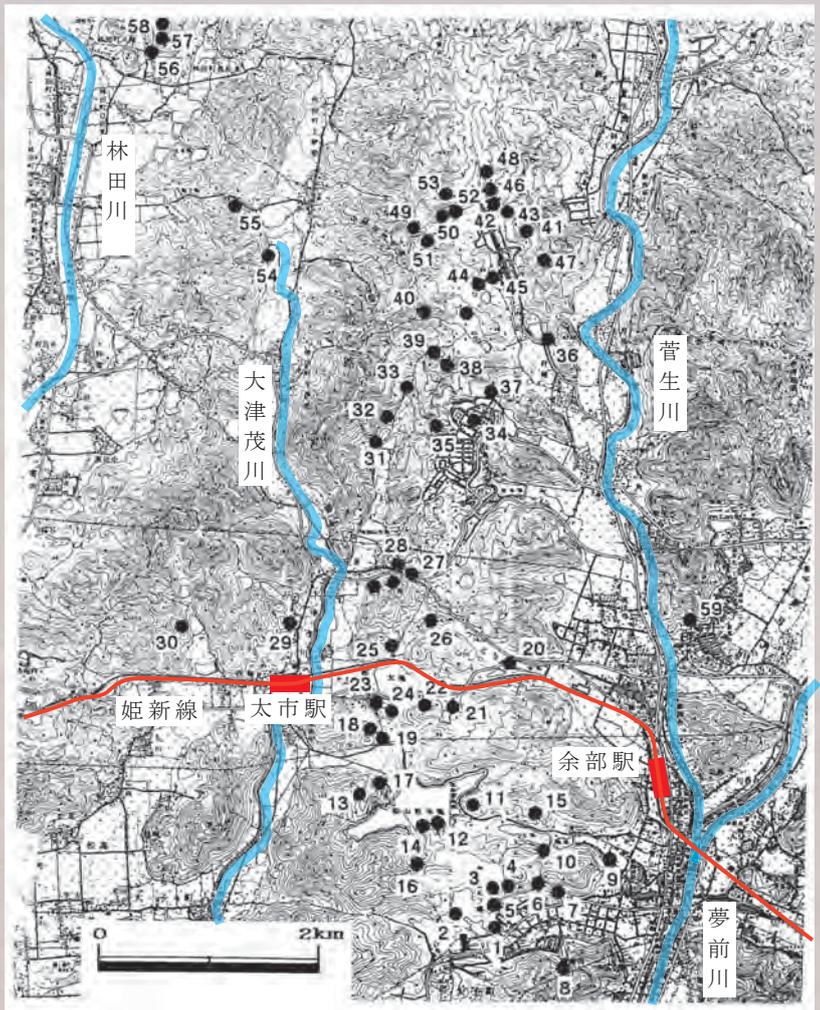
姫路市北西部の丘陵に位置する窯跡群です。

古墳時代の窯 11 基以上、飛鳥時代の窯 16 基以上、奈良～平安時代初期の窯 42 基以上からなる大規模な窯跡群です。

奈良時代に最盛期を迎え、平安時代前期には廃業しているようです。

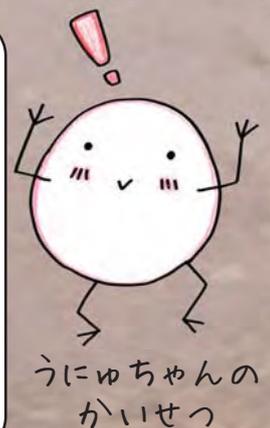
はりまこくふ

立地として、播磨国府（播磨国の役所）の推定地（現在の姫路市街地東側周辺）に近く、**播磨国府へ陶器を出荷していた**のではないかと推測されています。



窯の分布図 (永井1997を加筆)

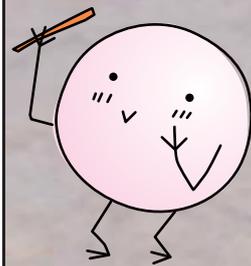
立地として国府にいちばん近くて、播磨国が管理して
そんな窯跡うにゅ。奈良時代には勢いがあるけど、平安
前期には廃業しているところが、社会の変化や律令体制
の崩壊を思わせるうにゅね・・・
今後の調査研究に期待うにゅ！



実は、**窯を造って維持するのってものすごく大変！**

粘土や水も必要だし、窯には何日も火を入れているから、燃料の薪がたくさん必要。薪や粘土を運ぶ人、陶器を作る人、窯の番をする人、出来た陶器を運ぶ人など、たくさんの人手や資源が必要うにゆ！

なので、**窯を経営するには、しっかりした組織や経済的な余裕が必要うにゆ。**



うにゆちゃんの
かいせつ

古墳時代には、各地域に古墳を築くような有力な王様

(首長)が、**飛鳥・奈良時代には国や郡の役所が窯を経営**していたといわれているんだけど、平安時代の後半になると、国や郡の役所の力が弱くなる(律令体制が崩壊＝簡単にいうと、国や郡の役所にきちんと税金が納められなくなる)ために、全国各地の窯は廃業に追いやられて、**中世には備前や常滑など、一部の陶器窯を残して各地の窯は無くなってしまいうにゆ。**



うにゆちゃんの
かいせつ

播磨地域では、平安時代末に京都へたくさんの瓦を出荷したり、片口鉢や甕に代表される「東播系須恵器」という商品を開発をして、窯を維持することに成功するんだけど、**他の産地との競争に負けて、室町時代に入る頃には播磨地域も陶器づくりをやめてしまいうにゆね。**でも、**平安～鎌倉時代に全国流通した播磨の陶器は日本各地の陶器のかたちや作り方に強い影響を与えて、中世以降の日本の陶器のかたちの原形になっとうにゆ！**



うにゆちゃんの
かいせつ

西有年・大山遺跡(赤穂市西有年)

赤穂市北西部の丘陵上にある窯です。

発掘調査は行われていませんが、窯の壁の一部や陶器が採集されています。

採集された陶器は、**鎌倉時代初め(13世紀前半)**のものと考えられ、赤穂市**唯一の中世の陶器窯**です。

最大の特徴は陶器の形状で、**初期の備前焼と全く同じ形状・作り方**をしていることです。備前焼と同じ形状の陶器が、備前国以外で製作されることは極めて珍しく、備前焼の作陶技術の伝播を考えるうえで重要な窯跡です。



窯付近のようす

▲現在では完全に山の中になっています。

赤穂は備前に近いから、備前焼と全く同じ陶器を焼く窯ができたみたいいうにゅ！

近くには筑紫大道(西国街道)が通っているから、交通路と関係があるのかも？



うにゅちゃんのかいせつ

かんで

神出窯跡群 (神戸市西区神出町)

神出窯跡群は 80 基以上からなる大規模な窯跡群で、**平安時代後期～鎌倉時代 (10 世紀～ 13 世紀初頭)** に陶器と瓦生産を行っていた窯です。

同時代、西日本最大の陶器・瓦生産地として栄えていましたが、その最大の特徴は、**瓦や甕が平**



密集する窯 (兵庫県立考古博物館提供)

▲谷筋に沿って7基の窯が密集しています。

安京へと出荷されていたことにあります。

神出窯で焼かれた瓦は、^{へいあんきゅうちょうどういん}平安宮朝堂院や^{みんぶしょう}民部省 (京都市上京区・平安時代の国の役所)、^{さんじょうにしどの}三条西殿 (京都市中京区・^{しらかわほうおう}白河法皇や^{いんのごしょ}鳥羽上皇の住んだ院の御所) といった宮殿や役所のほか、^{そんしょうじ}尊勝寺 (京都市左京区) や^{ちょうほうじろっかくどう}頂法寺六角堂 (京都市中京区) などの天皇・上皇が建立した寺院から出土しています。

こうした瓦は、都から要請を受けた播磨国の役人 (^{はりまのかみ}播磨守) が生産・出荷を指揮したものと考えられています。都へ大量の瓦を出荷することで莫大な利益とうしろだてを得た東播磨地域の窯は、**瓦と同時に甕やこね鉢などの陶器も全国各地へ出荷するようになり、西日本最大のシェアを誇るようになります。**

日本各地へ出荷された東播磨産の陶器は、当時の日本を代表する陶器の1つとなっていました。こうした陶器を研究者の間では「東播系須恵器」と呼んでいます。



一般的な窯 (兵庫県立考古博物館提供)

▲構造自体は古墳時代のものと変わりません。



小型の窯

(兵庫県立考古博物館提供)

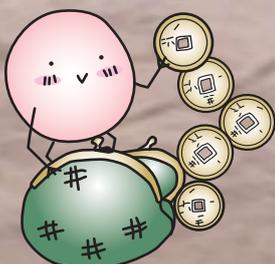
きせるじょうがま

◀煙管状窯とよばれる小型の窯。
この時代に新たに出現しました。

特殊な窯

(兵庫県立考古博物館提供)

陶器窯の床に瓦が敷かれています。▶
除湿のための工夫とされ、窯の改良を試みたもののようです。



うにゅちゃんの
かいせつ

東播系須恵器は商品として全国に流通したうにゅ。
だから、燃料の薪を節約したり、安く作れるように、
窯の改良や試行錯誤が行われているうにゅ。

うおずみ

魚住窯跡 (明石市魚住町)

魚住窯跡群は 30 基以上からなる窯跡群で、**平安時代末～室町時代 (12 世紀初め～14 世紀末) に陶器と瓦生産を行っていた窯**です。

同時代、神出窯跡群とともに、西日本

最大の陶器・瓦生産地として栄えていましたが、その最大の特徴は、**その立地と流通圏の広さ**にあります。

明石市魚住町は現在では海岸線から離れていますが、当時は海が入り込み、**「魚住泊」**として古代から有名な港町でした。その周辺に窯が続々と築かれていることから、「魚住泊」は**東播系須恵器を全国へと出荷する物流センター**となっていたと考えられています。

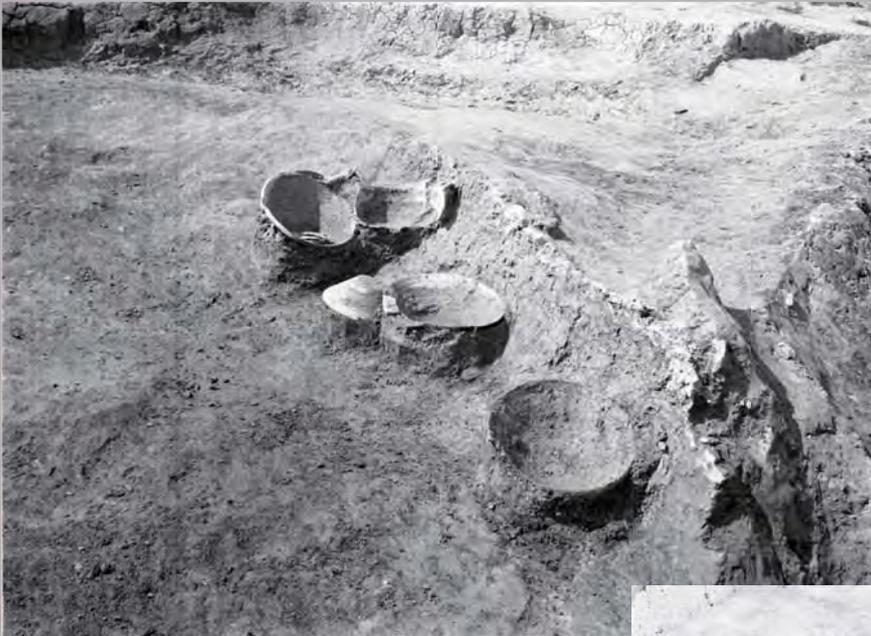
魚住窯は、港に近いという立地から、遠隔地への出荷を狙った窯と考えられ、その証拠に**西は福岡県、東は埼玉県まで、日本各地から魚住窯に代表される東播系須恵器が出土しています。**



発掘された窯

(兵庫県立考古博物館提供)

▲内部に須恵器が残されています。



須恵器の出土

◀ 窯の中から須恵器の鉢が
並んだ状態で出土しています。

特殊な窯

陶器と同時に瓦が出土しています。▶
瓦と須恵器を同時に焼く、
瓦陶兼業窯です。



東播磨の窯では、最初は瓦・甕・小皿・椀・鉢などを
生産しているけど、次第に瓦・小皿・椀は少なくなって、
甕とこね鉢の生産量が多くなるうにゅ！

これは京都での瓦需要が無くなったこと、小皿や椀などの
周辺の集落へ出荷していたものを生産しなくなったこと、
甕とこね鉢を主力商品として全国へ出荷したことが原因と
いわれているうにゅ！「東播系須恵器」の特徴は、
自給自足のために作っているのではなく、全国向けの
「商品」として、売るために作ってるというところうにゅね！

古池焼窯跡 (相生市古池本町)

相生市南部にかつて「長池」とよばれた池があり、その池岸に存在した陶器窯です。池の名から古池焼、もしくは相生焼おうと呼ばれる陶器を生産していました。



古池焼窯跡

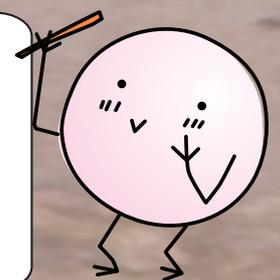
▲現在は住宅地になっています。

文献によれば**文化 10 (1813) 年に赤穂藩の**

許可を得て、村人によって開かれた民窯みんようとされています。しかし、赤穂藩主が複数回視察に訪れているなど、**赤穂藩を後ろだてとし、藩窯はんように準じた待遇を受けた**といわれています。しかし、明治時代に入ると赤穂藩の援助が無くなったためか、明治 10 (1877) 年頃に廃業したとされています。

製品は多くは伝えられていませんが、淡い緑色の素朴な陶器が多く、徳利・行平鍋・播鉢・小鉢・灯明皿などの**安価な日用雑器を生産していた**と考えられます。一説にはたつの市の野田焼の影響を受けているといわれます。

江戸時代、赤穂藩内にあった唯一の陶器窯が古池焼
うにゅ！赤穂城下町の発掘調査でも、古池焼と思われる
陶器がたくさん出土しているうにゅ！



うにゅちゃんの
かいせつ

野田焼窯跡 (たつの市揖保川町)

揖保川下流の西岸部にある丘陵裾に位置する窯です。窯本体（明治時代の連房式登窯）が半壊しながらも現存しており、現在でも見ることができる珍しい窯です。



現存する窯跡

▲窯の後半部分が今でも残っています。

文献によれば寛政 9

(1797) 年に創始されたもので、茶碗・皿・徳利など、地元民のための日用雑器を焼く民間の窯（民窯）であったとされています。しかし、しだいに龍野藩主脇坂家の管理や支援が行われるようになり、藩窯^{はんよう}としての性格も持つようになったとされます。

作品はクリーム色の釉薬をかけた素朴なものが多く、日用雑器が主体ですが、陶器以外に磁器も生産していたとされます。素朴な絵付けがなされているものが多いことも特徴です。

明治時代には完全に民間の窯（民窯）となりましたが、経営が成り立たなくなったようで、明治前半には廃業しています。

江戸時代後期～幕末、揖保郡では新宮焼・野田焼・林田仁清焼、赤穂郡では赤穂焼・古池焼・那波仁清焼、といった具合に、たくさんの個性的な陶器窯がひらかれていたうにゆ！



赤穂御蔵焼窯跡 (赤穂市上仮屋)

かつて赤穂城の東側、現在の加里屋川岸に存在した窯です。**開かれたのは明治初期**とされ、江戸時代の赤穂城の米蔵の跡地にあったことから、この名が付いたといえます。



赤穂城米蔵跡の発掘調査

▲現在は赤穂市立歴史博物館となっている。
右手は加里屋川。

この窯が作られたのは、**明治維新によって失業した旧赤穂藩士の失業対策**で

あったといわれ、ばんようとうざんやき姫路の播陽東山焼の職人から指導を受け、陶磁器の生産を行っていたともいわれています。そのためか、作品は植木鉢や大型の徳利、細工や装飾のあるものなど、高級志向の陶磁器が主体のようです。

しかし、もともとは武士であった人々が制作にあたっていたため、**作品は未熟で、粗雑なものが多かった**ようです。これが原因で、数年で廃業に追いやられたようですが、その実態は不明です。

昭和60年代に行われた赤穂市立歴史博物館建設に伴う発掘調査で、窯道具や失敗品が出土し、窯の存在が裏付けられました。

資料や作品が少なく、よくわかっていない窯うにゅ！
でも、作品は少し下手っぴ・・・うまくないうにゅ・・・
伝えられているとおり、失業した武士が焼いていたよう
うにゅね！



赤穂焼 (赤穂市加里屋)

もともと鑄物師であつ
おおしまこうこく
た **大島黄谷** (1821 ~
1904 年) が、赤穂へ来
ていた江戸今戸焼の陶工
さくねべんじろう
であつた作根弁次郎に陶
芸技術を教わり、**嘉永5**
(1852) 年に創始した陶
器です。窯はかつて新土
手とよばれた旧千種川



大島黄谷の赤穂焼窯跡

▲現在は住宅地や赤穂小学校の校庭になっています。

(現・加里屋川) の堤防脇の自宅にあり、^{しんどてやき}「新土手焼」とも呼ばれました。

大島黄谷は楽焼や織部焼など、有名な陶器の写しも制作していましたが、最も有名なものは「^{らくやき おりべやき}雲火焼」です。雲火焼は橙や黒の色調、夕焼雲のような模様から、そう呼ばれています。作品は香合・茶碗・風炉などの茶道具が多く、芸術的な作品が多く残されています。

大島黄谷は雲火焼の制作技術を門外不出とし、弟子にも教えませんでした。そのため、雲火焼の製法は大島黄谷が亡くなることで一度失われてしまいました。

そのため、弟子であつた^{まえがりょうじょう}前賀蓼城 (1864 ~ 1928 年) は、雲火焼とは異なった独自の作風を生み出し、「赤穂焼」として製作を続け、数々の個性的な作品を残しています。

残念ながら、赤穂焼も前賀蓼城が亡くなると、
跡継ぎがならず、途切れてしまったうにゅ・・・



赤穂雲火焼 (赤穂市御崎)

赤穂雲火焼は、赤穂瀬戸内窯で製作されているもので、**大島黄谷が創始した雲火焼を再現した**ものです。

大島黄谷の死後、雲火焼の作陶方法は長らく不明でしたが、^{ももいよしこ}桃井香子氏・^{ながむねしげみつ}長棟成光氏・^{なばほうしょう}那波鳳翔氏らが昭和 50 年代から作

陶方法の研究を開始し、**昭和 62 (1987) 年にその再現に成功**。赤穂瀬戸内窯 (桃井氏・長棟氏) として、現在も制作をつづけています。

平成 5 (1993) 年には**兵庫県伝統的工芸品**に指定され、江戸時代の陶器づくりの伝統を受け継ぎながら、赤穂で新たな陶器づくりが続けられています。



再現の窯

(赤穂瀬戸内窯・桃井ミュージアム)

▲雲火焼制作技術の研究に使用された窯。

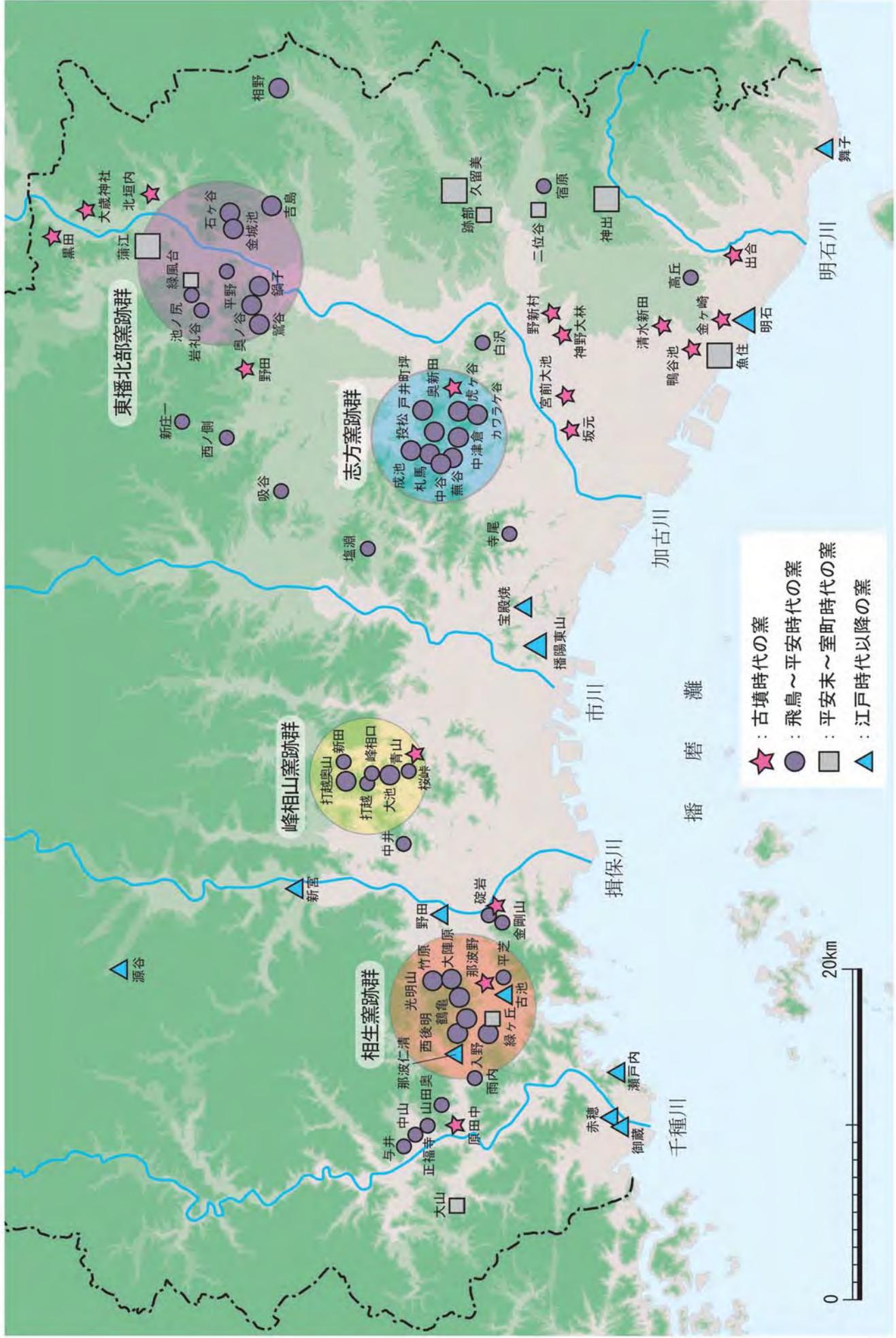
約 80 年ぶりに復活した雲火焼！

今では日常のうつわも制作されているうにゅ！

赤穂や播磨の陶器づくりの伝統は、

今も続いているうにゅよ！





播磨地域の主な窯跡

(兵庫県教委 2011 『兵庫県遺跡地図』・青木 1993 『兵庫のやきもの』等を参考に作成)

～おわりに～

約 1,600 年におよぶ播磨の陶器の歴史。現在でも日本有数の窯場というわけではありませんが、その歴史は現代でも制作されている個性的な陶器に引き継がれて、新たな歴史を刻み続けています。今後も人々の努力によって、播磨の陶器の歴史は続いていくことでしょう。

ご観覧ありがとうございました！
またのお越しをおまちしています！



最後になりましたが、本展を開催するにあたり以下の方々にご協力いただきました。心よりお礼申し上げます。(敬称略・五十音順)

- (機関・団体) 相生市立歴史民俗資料館・明石市教育委員会・赤穂市立歴史博物館・
赤穂瀬戸内窯・岡山理科大学考古学研究室・
たつの市立龍野歴史文化資料館・備前市教育委員会・
兵庫県立考古博物館・桃井ミュージアム・
- (個人) 石井 啓・池田征弘・稲原昭嘉・亀田修一・木曾こころ・
新宮義哲・長棟州彦・長棟光亮・中濱久喜・菱田哲郎・桃井香子・
森内秀造